

# 特別支援教育の観点での学校改革

一人ひとりのできること

やろうとする気持ちを育み

学校全体の活力を高める取組

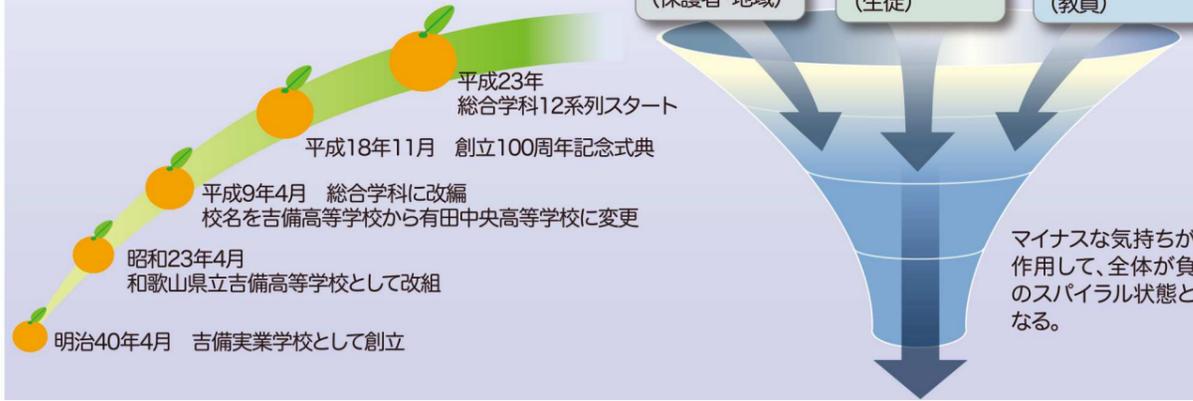


和歌山県立有田中央高等学校

# 学校の抱えていた課題

農業系専門学校として設立され、地域農業の発展に貢献したが、農業の低迷や普通科志向により課題が山積みとなった。その後、総合学科として改編し、心機一転を図ったが、生徒指導案件や退・転学者や進路未決定者・早期離

職者の増加、部活動の壊滅的状況等、改編前よりも深刻な状態に陥り、地域からの信頼も低下していた。



# 解決への突破口

## 本校の特別支援教育の観点とは

発達障害のある生徒への理解や支援方法について認識を深める。

学習や生活面で躓いたり、前向きな気持ちを見失いがちな生徒を指導・支援する教育システムを開発する。

すべての生徒が希望や展望を抱き、更なる自己実現に向けて、前向きに取り組む学校環境を創成する。

## 期待される効果

- ・生徒一人ひとりが出来ることを拡げることで、前向きにやろうとする気持ちが育まれ、
- ・前向きな生徒がひとりでも増えることが、学校全体の活力を高め、
- ・そのことが生徒一人ひとりの持っている潜在能力・意欲を活性化させる。

- ・生徒の変化は、教員に自信と展望を持たせ、更なる取組へのエネルギーとなり、
- ・保護者や地域社会の意識の変化へと結びつき、
- ・負のスパイラルからの脱出へとつながる。

## 研究の経過

- 平成22年度 分析・構想・準備・調整 (イノベーションのスタート)
- 平成23年度 特別支援教育総合推進事業 (文部科学省)  
『高等学校における発達障害のある生徒への支援』
- 平成24年度 特別支援教育専門性向上事業 (和歌山県教育委員会)  
『高等学校における特別支援教育県研究指定』

# 特別支援教育の観点で学校全体の活性化を図る

# 特別支援教育の取組

## 生徒理解を深める

### 生徒カルテの作成と活用

- ・教員の生徒に関する気づきや面談の概要、ケース会議での記録、アンケート等の調査結果を記入。
- ・指導・支援の経過や方針に加え、中学校・外部機関からの情報等も記録。
- ・校務パソコンで全教員が閲覧でき、日々の指導場面だけでなくケース会議等で、指導・支援方法を検討する際にも活用。

### 各種アンケート調査の実施

- ・Q-U「楽しい学校生活を送るためのアンケート」を

各学年1学期に実施し、学級での満足度と意欲・学級集団の状態変化を年次進行で把握。

- ・人権、生活実態、規範意識等の各種調査を行い、生徒の心情把握とともに、生徒の自己分析や自己理解をサポート。

### 入学前三者面談や中学・関係機関との情報交換

- ・合格者登校日に生徒・保護者・教員の三者で面談を行い、入学直後の指導に反映。
- ・多方面からの支援を展開するために、中学校や関係機関との連携を深化。

## 指導・支援体制の確立

### 校内体制の整備

- ・生徒支援部の新設。  
特別活動・特別支援教育・保健・教育相談・人権教育等を総合的に担当。
- ・特別支援校内委員会の設置。
- ・個別の支援(クールダウン等)ができる部屋の整備。

### 情報交換会やケース会議の実施

- ・情報交換会  
年に5回、気がかりな生徒の状況把握や指導・支援内容の検討。
- ・ケース会議  
特別な指導・支援が必要な事案が発生した際、関係者が参集し、対応方法や役割分担等を決定。
- ・スクールカウンセラー  
情報交換会やケース会議等に参加し、専門的な視点からの指導助言。

### 授業・学習環境のユニバーサルデザイン化

- ・創意工夫の観点を共通化した授業づくり。
- ・教室のユニバーサルデザイン化等、安心して、落ち着いて学べる環境づくり。

### 考査・評価方法の工夫

- ・考査問題用紙の書式の整備。
- ・日々の授業における学習への取組に加えて、補習での努力等を反映させる評価。

## 指導・支援力の向上

### 校内研修

- ・LD生徒の困り感の疑似体験等、発達障害への理解の深化
- ・ケース会議における指導・支援プラン作成の演習
- ・就労において特別な支援を要する生徒の事例研究等

- ・校内研修に近隣の支援学校教員が参加し、互いに研鑽を深める。
- ・生徒や卒業生の事例を取り上げることで、生徒理解を深めるとともに、研修の実効性を高める。

### 先進校訪問

特別支援・授業改善・特別活動などの先進校を訪問

校内研修会において共有化

教育システム改革、指導力向上へ

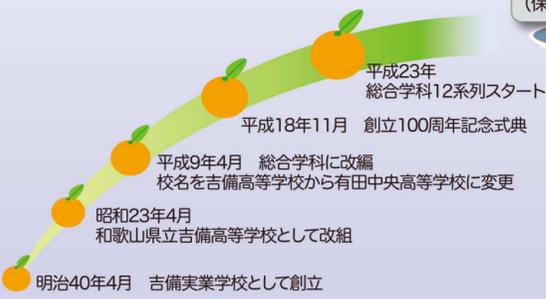
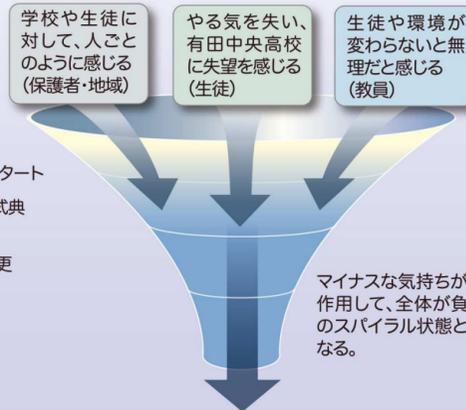
### 授業力の向上

- ・校内の若手教員による授業改善研究会の活動を中核として、「できる授業・わかる授業」に向けた取組を推進。
- ・他校種の退職校長を授業アドバイザーとして招聘し、指導助言を得る。

# 学校の抱えていた課題

農業系専門学校として設立され、地域農業の発展に貢献したが、農業の低迷や普通科志向により課題が山積みとなった。その後、総合学科として改編し、心機一転を図ったが、生徒指導案件や退・転学者や進路未決定者・早期離職者の増加、部活動の壊滅的状況等、改編前よりも深刻な状態に陥り、地域からの信頼も低下していた。

学校や生徒に対して、人ごとのように感じる(保護者・地域) やる気を失い、有田中央高校に失望を感じる(生徒) 生徒や環境が変わらないと無理だと感じる(教員)



# 解決への突破口

本校の特別支援教育の観点とは

発達障害のある生徒への理解や支援方法について認識を深める。

学習や生活面で躓いたり、前向きな気持ちを見失いがちな生徒を指導・支援する教育システムを開発する。

すべての生徒が希望や展望を抱き、更なる自己実現に向けて、前向きに取り組む学校環境を創成する。

期待される効果

- ・生徒一人ひとりが出来ることを広げることで、前向きにやろうとする気持ちが育まれ、
- ・前向きな生徒がひとりでも増えることが、学校全体の活力を高め、
- ・そのことが生徒一人ひとりの持っている潜在能力・意欲を活性化させる。

- ・生徒の変化は、教員に自信と展望を持たせ、更なる取組へのエネルギーとなり、
- ・保護者や地域社会の意識の変化へと結びつき、
- ・負のスパイラルからの脱出へとつながる。

研究の経過

- 平成22年度 分析・構想・準備・調整(イノベーションのスタート)
- 平成23年度 特別支援教育総合推進事業(文部科学省) 『高等学校における発達障害のある生徒への支援』
- 平成24年度 特別支援教育専門性向上事業(和歌山県教育委員会) 『高等学校における特別支援教育県研究指定』

# 特別支援教育の観点で学校全体の活性化を図る

# 有田中央高校イノベーション

特別支援教育の研究を支柱として、22年度より始まった学校改革(有田中央高校イノベーション)の3大構成

## 意識改革

教員:学校ミッションの徹底。  
(地域社会の中核を担う若者の育成)  
生徒:自己有用感の醸成。  
(君達は期待の星になれる)  
保護者・地域:地域社会の後継者をみんながかりで育てる。  
(地域協育会の発足)

## 教育システム改革

教育課程や学級編成、校時の見直し、生徒指導における特別指導の導入、校務組織の再編等。

## 教育活動の質的改革

学習指導、生徒理解、生徒対応等における教員の資質向上。生き方・在り方を深めさせるキャリア教育の創造。地域の活力を学校教育に取り入れる等。

## 特別活動への参加意欲を高めるシステム

活動へのきっかけ作りや活動の質を高めるために、木曜7限の部活動必修化、部活動と系列・コースの学習の連携、地域協育会による生徒の活動支援を行う。



## 自らの課題を克服させる指導

生徒指導措置における特別指導では、登校させて指導を行うことで、多くの教員が生徒の内面の成長に関わる。事案によっては、生徒指導部と生徒支援部が協同して対応する。

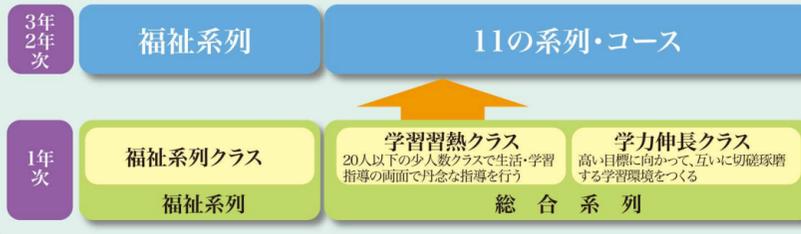


## 夢や希望を抱かせるシステム

「総合学科の学び」の質を高めるために、2・3年次では12の系列・コースから、自分の学びに最適なものを選び、2年間で専門性を高めるカリキュラムとした。

## 3年間を見通したキャリア教育

「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」、「系列での学習」を中心にして、自己を見つめることと、社会への関わりを意識させながら、進路実現に繋げていく。



## 社会で必要な力を獲得させるシステム

苦手意識の強い英語、数学、国語については3年間全員必修とした。毎朝10分間の学び直しを主とした朝学を行うことで、基礎学力の定着のみならず、基本的な生活習慣の向上につながる。

## 1年次の少人数HR編成

高校生活に躓くことが多かった1年次を20人以下の少人数HR(学習習熟クラス)に編成し、生活指導・学習指導の両面で教員が生徒に十分に関われる体制を整えた。



## 地域とのつながりを深める情報発信

中学生対象の学校説明会やメールを用いた保護者への情報配信、全教員が一齐に街頭や校門で生徒を出迎える等、保護者・地域から見える取組を展開している。



## 地域の活力を生かした学校づくり

学校・家庭・地域社会が協同して、本校生徒を地域社会の中核を担う若者へ育てることを理念とした地域協育会が発足し、学校行事である品評会を地域の催しとして復権させることにも取り組んでいる。



## 効率的で組織力を高めた校務運営

校務分掌を「生徒への関わり」、「学習への関わり」、「企画調整」の3局体制で再編、整理した。イノベーションを進めるにあたって、分掌を横断するプロジェクトチームやワーキンググループを組織し、教員の企画・提案力を高めるとともに、中堅教員の育成にも繋がる。

平成22年度～24年度

## 3年間の取組の成果

### 系列での学びが機能するようになった。

農業系列では、農業クラブ活動や校外実習等がうまく絡み合っ  
て、教室での学びの質や意欲を高め、系列生徒全体がより高い  
目標を目指すようになってきた。



### 授業が成立するようになった。

授業規律の確立と授業改善への取組が進み、生徒が  
互いに学びを深めあう等、意欲的に学習に励む雰囲気  
が出来てきた。

### 信頼関係に基づいた生徒指導が 出来るようになった。

校内に生徒指導面での落ち着きが出てきて、  
問題行動を繰り返す生徒や、生徒指導に絡む  
進路変更が減少している。

### 放課後に生徒の声が 響く学舎になってきた。

部や同好会の復活・新設が相次ぎ、  
部活動への参加人数の増加及び  
活動の質の向上が見られるよう  
になった。

教員が生徒を  
励まし、支援  
する立ち位置  
に立つことで、

自らの可能性や  
展望を見出し、  
前向きに取り組  
む生徒が増え、

学校全体に正  
のポテンシャル  
が生じるよう  
になり、

保護者や地域  
の意識や関わり  
方が変わって  
くる。

### 中退や転学者が少なくなった。

丹念な指導・支援を行い、生徒の成長を粘り  
強く待つというスタンスに立ったことで、進路  
変更をする生徒は減少している。

### 学校を担う意識を持った 生徒が多く育ってきた。

生徒会役員の意識が高まり、部活動  
に積極的な生徒を巻き込んだ朝の  
挨拶運動や、学校行事への取組が意  
欲的になり、より良いものを創りだそ  
うという機運が生まれてきた。

### 他者との関わりに前向きな 生徒が育ってきた。

中学生向けの学校説明会や地域協育会  
において活躍したり、ボランティア活動に  
積極的に関わる生徒が増えてきた。



### 教員の意識が変わってきた。

生徒集団が変わってきたことを実感して、教員が勇氣(展望)  
を持つようになり、地域社会への積極的な関わりや、前例踏襲か  
らの脱皮、同僚性が高まってきた。

### 地域からの声が変わってきた。

挨拶をよくするようになった等のお褒めの言葉  
も頂けるようになり、インターンシップ、ゲストテ  
ィチャー、課外授業等に積極的に関わって  
くれる地域企業が増えてきた。



### さらなる一步を

何かにつけて萎縮しがちな若者の心に火をつけて、就労に対して  
希望を抱かせたり、社会において人々と積極的な関わりを持つことに  
前向きな意識を育てることを目標に取り組んできた。3年間のイノベー  
ションで、学習面、学校生活面、特別活動面での成長を実感できるよ  
うになってきたが、校内での課題解決や自己評価の域を出ていないも  
のも多い。本校卒業生が社会でどう貢献し、どう評価されるかで3年  
間の指導・支援の本質が問われ、その点からも、進路実現は学校にお  
ける「人育て」が評価される最も現実的な問題のひとつである。

教員が、生徒一人ひとりの成長を信じるとともに、社会で期待され、  
必要とされる人材へ「丁寧に磨きあげる」、「鍛え上げる」という意識  
を一層強く持って取り組むことが必要である。

年々、複雑で深刻な課題を抱えた生徒が増えているように感じられ  
る中で、今後、保育園・幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等と連  
携した地域全体の学校教育力向上が重要となる。一方、我々に差し  
迫った責務は、近い将来、地域の構成員や次世代の保護者となる高  
校生に対し、夢や希望を持ち続けることや、互いを支え合う事の重要  
性をいま一度理解させ、実践する意欲や態度を育てることである。

現状は、教員が変わり、生徒が変わり、学校が変わり、地域社会が  
変わるという壮大な構想の緒に就いたばかりであるが、今こそ、教育  
を地域の将来問題、「公(おおやけ)の問題」として捉えなおす好機で  
あり、教育の更なる質的向上が求められている。

このイノベーションが一過性のカンフルに終わらない為にも。